

ずいそう

## 朱鷺の野生復帰に思う

後藤文夫



2020年3月現在、佐渡における野生化で確認された朱鷺の個体数は401羽だそう。

また、朱鷺が棲める豊かな生態系を維持した里山と、生物多様性を保全する農業の姿が認められ、「トキと暮らす郷づくり」を進める佐渡の里山が2011年に日本で初めて世界農業遺産に認定されている。

高度成長期のまっただ中の1968年、朱鷺の絶滅を危惧し国内最後の朱鷺「キン」を保護の為に捕獲した。其の年は、私は自身の成長を期待して佐渡を離れ、東京へと向かった年でもあった。

その後、私は建設機械の開発及び企画販売に従事し、2017年母の都合で佐渡に帰郷し、現在は業務を一部継続しつつ、佐渡の自然を満喫している。

一方、朱鷺は上記のとおり絶滅しかかったにもかかわらず、現在は大幅に増加しているわけである。朱鷺の野生復帰の背景を考えると、小生が約半世紀前から島外で関わってきたことと「自然」という言葉で結びついてきた。

朱鷺は字のとおり朱（赤色）の鷺（サギ）という漢字で記し「トキ」と読む。学名はニッポニア・ニッポンと言い、日本を代表するきれいな鳥である。昔は日本全国に沢山棲んでいたが、年とともに減少し最後のすみかとして選んだのが能登と佐渡のようだ。そして、佐渡の朱鷺が国内最後となった。

佐渡は中世鎌倉・室町時代には順徳上皇や日蓮など有名な人が流されてきた。さらに関ヶ原の戦いの次の年にここで金鉱が見つかり、江戸時代には、金、銀、銅が沢山掘り出され、まさにゴールドラッシュだったとのこと、その為、人口も現在の約2倍（約10万人）となっていた。

それらの人々の食を賄うために朱鷺の餌場となる棚田をはじめとした水田を多く作ったことに加え、1000m級の山々が連なり、山や深い森がもたらす恵みは、朱鷺にとっては絶好の棲み処だったとのこと。

しかし、明治期において一般庶民の狩猟が開始され明治後期に規制されるまで、狩猟により減少した。さらに太平洋戦争を経て1955年くらいまでには、森林の伐採が急速に進み、佐渡の経済を支えた金山も衰退していき、山の中の田んぼ（特に棚田）は耕す人が少なくなり水はけが悪くなった。またその他の田んぼもその後は、農薬を使い朱鷺のえさになるような

じょうやかえるなどの生物が少なくなってしまい、どんどんその数が減少していった。

その対策として、1981年には先に捕獲したキンに加え5羽全てを捕獲し、人工増殖を試みたが、全て失敗に終わった。そして2003年には、国内最後の朱鷺「キン」が死亡した（人間であれば約100歳位）。しかし、幸いにも1999年には中国よりペアを贈呈され、朱鷺保護センター内で人工増殖に成功した。そのころには森林の整備も進み、また、「朱鷺と共生する農業システム」の構築を実践してきた結果、2008年には、全野生個体保護から27年間の空白期間を超えてふたたび佐渡の野山に放鳥を行えるまでになり、又2010年にはなんと31年ぶりに放鳥された朱鷺の営巣を確認できたそう。そして冒頭に述べたように今や、多くの野生化した朱鷺を確認するまでになっている。

思えば、私が関係した建設機械の開発も1990年代半ばまでは、大型化、高性能化そして省人化、省熟練化などが主な開発のテーマであり、最終的には全自動型ロボットの機械なども世に出してきた。自然に対する問題意識が大きくなったのは、国内で保護された朱鷺の繁殖をあきらめ、中国より贈呈された朱鷺に期待をかけた前前年、1997年の気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3、京都会議）での京都議定書が採択されたところである。その頃より、自然を配慮した排出ガス対策型建設機械や工法を次々に開発するようになった。そして現在、国内では特定特殊自動車排出ガス規制（通称：オフロード法）2014年基準が市場に出され、欧州では欧州ノンロードディーゼル第5次排出ガス規制（EU Stage V）になっている。同時にそれを使う工法や出来上がる構造物なども、自然に配慮したものが多くなってきている。

朱鷺のような鳥を含め自然の中の生き物は食物連鎖という鎖の環でつながっているとされている。この鎖の環が切られていけば、地球のバランスが崩れると同時に、人間も大きな打撃を受ける。そして健康的な生活が出来なくなる可能性もある。最近続く異常な豪雨はもちろんのこと、今問題の新型コロナウイルスのまん延の一因もここにあるとの説もある。

佐渡での朱鷺のみごとな野生復帰を目の前にして、いわゆる自然遺産が棲む自然を保つことが次の世代への我々の大きな義務であると、改めて感じる次第である。